



速報版

幼児期から小学1年生の 家庭教育調査



年少児から小1生をもつ母親を対象に
家庭での学習準備の実態を探る



Benesse® 次世代育成研究所

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

2012年10月

調査の背景

近年、国際的に乳幼児教育への関心が高まっています。また、園や学校現場を中心に「幼小接続（※）」の取り組みが全国的に広がっています。これらの動きの中で、小学校以降の学習の基盤として、家庭と園による幼児教育での生活習慣の自立や、物事に集中し挑戦し、人とやりとりできることを中心とした「学びに向かう力」が重要視されています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子どもの生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考に対する家庭での取り組みの実態に注目しました。そこで、年少児から小学校1年生までの子どもをもつ母親を対象に調査を行い、家庭における子どもの学びの育ちと親のかかわりの様子、学びの形成に必要なことを探りました。

幼児期に必要な学習準備について

本調査では、幼児期から小学校の学習生活に移行し適応できるように必要とされる力、幼児期に育てたい生涯にわたって必要な力について考慮し、幼児期に必要な学習準備として3つの軸を置いて調査しました。



◎今後、本調査で年少児をもつ母親を対象に追跡調査を行い、家庭における学びの形成についてプロセスを追う予定です。

※「幼小接続」とは、幼稚園と小学校の接続のみではなく、幼稚園、保育所、認定こども園が行う幼児期の教育と小学校教育の接続を表しています。



調査概要

調査テーマ ● 幼児期から小学校1年生までの子どもの学びの様子と、親のかかわりや意識

調査方法 ● 郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）

調査時期 ● 2012年1月～2月

調査対象 ● 年少児～小学1年生のお子様をもつ母親5,016名（配布数14,000通、回収率35.8%）

調査地域 ● 全国

調査項目 ● 子どもの生活時間／子どもの学びの様子／母親のかかわり／母親の教育観／幼児期の振り返り／
父親の役割分担／園・小学校の満足度／習い事／読み聞かせなど

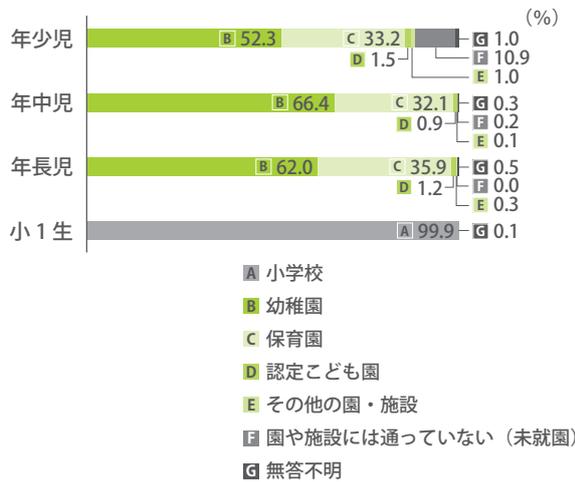
サンプル数 ● 5,016

	年少児	年中児	年長児	小学1年生	無答不明
男	695	594	543	636	5
女	669	627	580	649	11
不明	2	2	2	0	1
合計	1,366	1,223	1,125	1,285	17

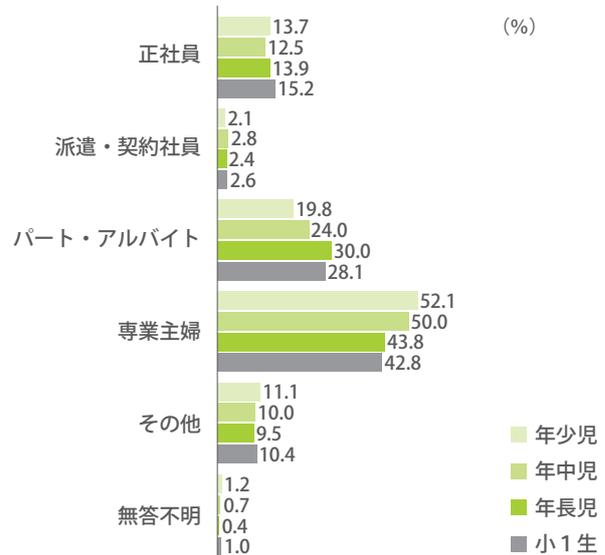
※この速報版では、
“年少児”は3歳児クラス
“年中児”は4歳児クラス
“年長児”は5歳児クラス
に通う年齢の子どものことを表しています。

基本属性

子どもの就園・就学状況



母親の就業状況

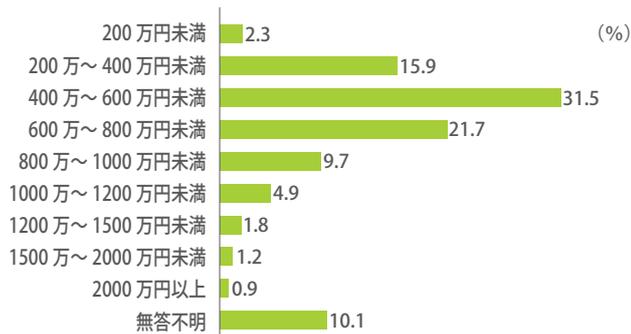


親の平均年齢

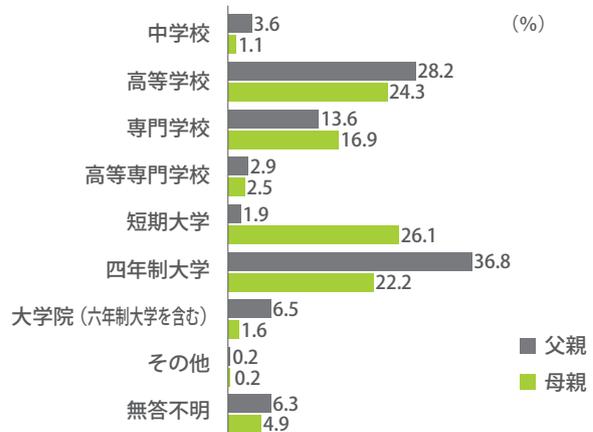
	年少児	年中児	年長児	小1生
父親	37.7	38.3	39.1	39.7
母親	35.8	36.5	37.3	37.8

※無答不明の人は、分析から除外。

世帯年収



最終学歴



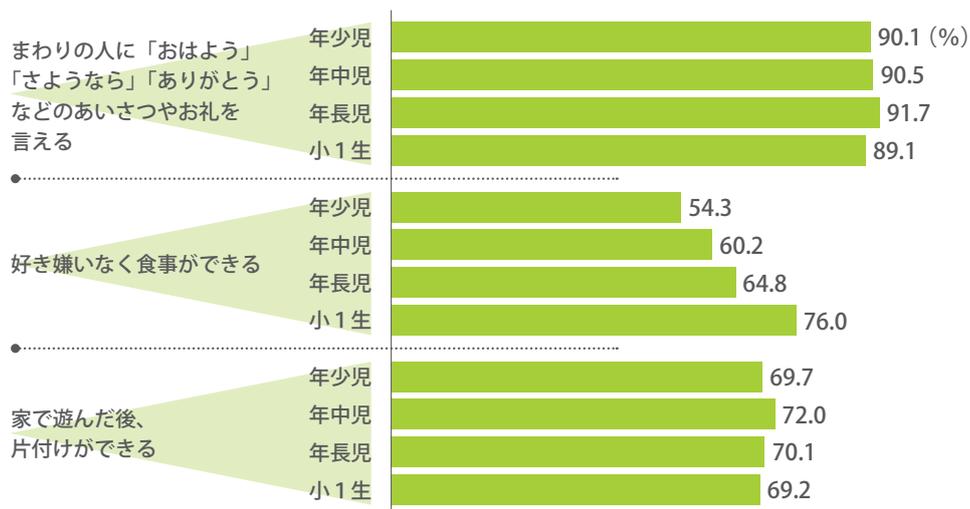
1 子どもの学びの育ち

学年ごとの学習準備

Q 現在、お子さまは、どれくらいあてはまりますか？

生活習慣 (年少児～小1)

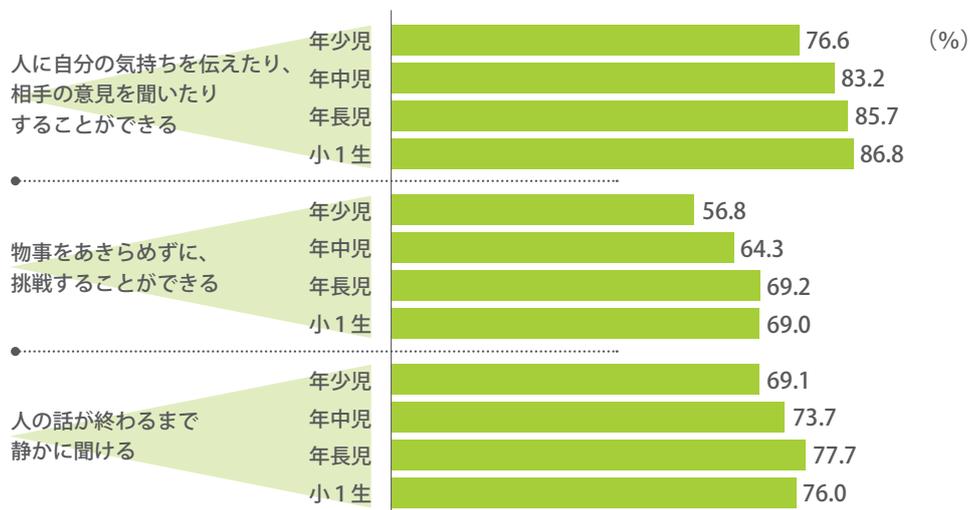
図 1-1 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



幼児期の生活習慣や学びに向かう力は個人差があり、なかには年長児で6～7割の項目もあった。一方、文字・数・思考は子どもの年齢が上がるとできる割合も増え、年長児で8～9割ができていた。

学びに向かう力 (年少児～小1)

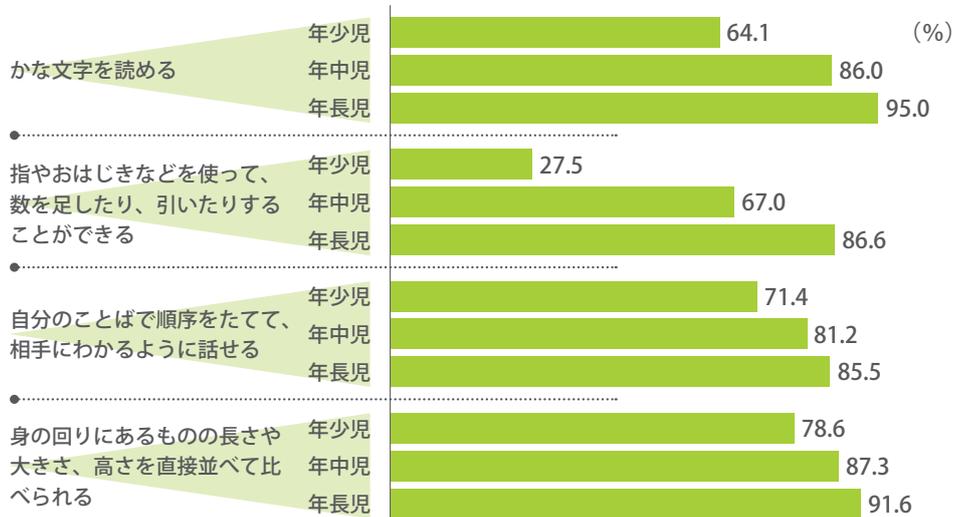
図 1-2 ■ とてもあてはまる+まああてはまる





文字・数・思考 (年少児～年長児)

図 1-3 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



解説

図 1-1 は、生活習慣で子どもができる割合をみたものである。年長児であいさつやお礼を言えるのは 91.7% だった。一方、「好き嫌いなく食事ができる」は 64.8%、「家で遊んだ後、片付けができる」は 70.1% だった。小学校に入学するとき、食事の好き嫌いがあったり、片付けなど身の回りのことがうまくできない場合もあることがうかがえる。

図 1-3 は、文字・数・思考についてである。「かな文字を読める」「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる」は、年少児から年長児にかけて 30% 以上増えていた。一方、図 1-2 の「物事をあきらめずに、挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」などの学びに向かう力や、図 1-3 の「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」「身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる」など論理的な思考力は、年少児から年長児にかけて緩やかな増加にとどまり、少しずつ育まれる様子がうかがえる（すべて「とても+まああてはまる」の割合。）



調査研究会より

幼児期に大切にしたいこと

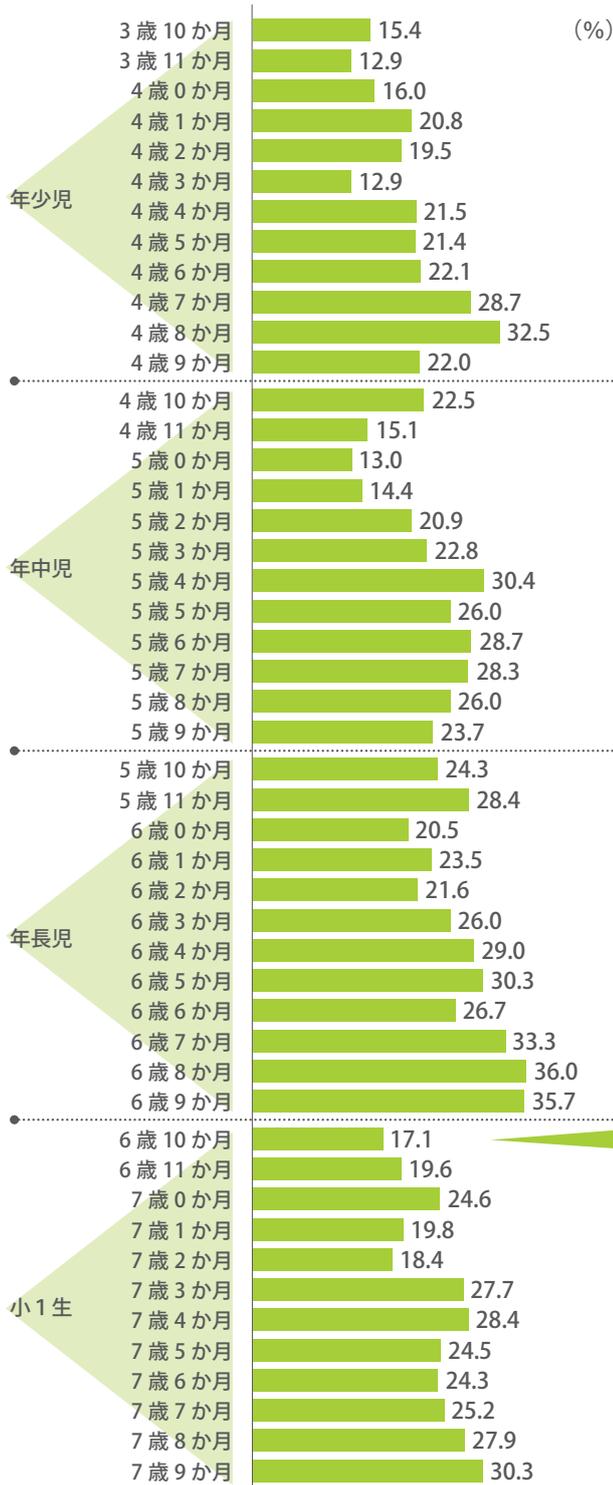
幼児期に育てるべき大切なことは何でしょうか。小学校での学習との関連でみたとしても、それはよくいわれる文字の読み書きなどよりはるかに広いものが含まれます。生活上の自立はいうまでもありません。文字が読めるとか数を数えるといったことも重要です。また、言葉を順序だてて話すとか長さや高さを比べることも必要です。それに加えて、人の話を聞き、自分の考えや意見を言え、物事に集中し挑戦でき、「なぜ」と疑問に思い、質問することが重要だとわかってきました。とくに、論理的な思考力や学びに向かう力は日頃の生活のいたるところで養え、そこでこそ育て身につくものです。特別な訓練というより、日々、保護者が子どもの行いに丁寧に応じることこそ、子育ての本道であることがわかります。

月齢別での学習準備

Q 現在、お子さまは、どれくらいあてはまりますか？

学びに向かう力：人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる

図 1-4 ■ とてもあてはまる



子どもの月齢別にみると、「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」などの学びに向かう力は、年長児から小1になるときに大きく下がる傾向がみられた。

※月齢別：2012年1月時点で何歳何か月だったかを割り出し、各月齢ごとに「とてもあてはまる」と回答した割合。

解説

図 1-4 をみると、同じ学年では月齢にしたがい、できる割合が上がる傾向にあるが、年長児から小1生になるときに大きく下がっていた。子どもにとって、園から小学校へと生活環境や学習環境が大きく変わるとき、その変化への適応に時間がかかった結果ではないかと思われる。また、同じ学年でも低月齢の子どものほうが、環境への適応に負担がより大きい可能性がうかがえる。

グラフは省略するが、文字・数・思考については、月齢にしたがってなだらかにできる割合が増える傾向だった。日常生活や園活動などを通して子ども自身が幅広い経験を積み重ねることで、文字・数・思考の習得が支えられているためと思われる。

大きく下がる

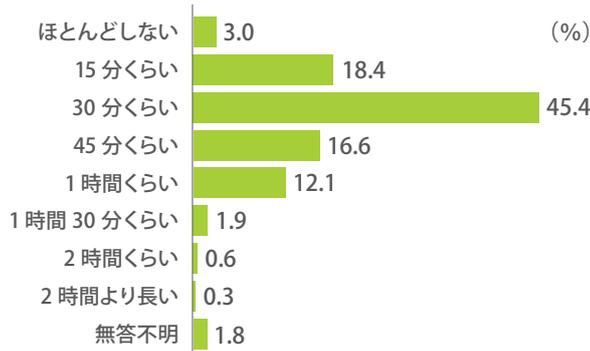


小1での家庭学習の様子

Q お子さまは平日、家でどれくらい勉強していますか？

平日の家での学習時間 (小1)

図 1-5

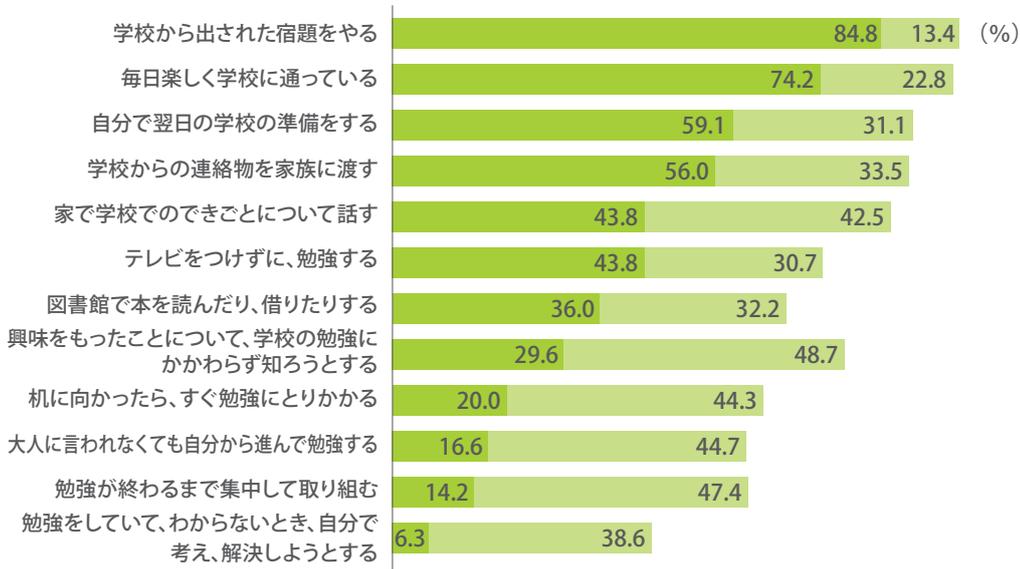


小1での家庭学習時間は、「30分くらい」が最も多かった。宿題をしたり、翌日の学校の準備をする子どもは9割以上、机に向かったらすぐに勉強にとりかかったり、勉強が終わるまで集中して取り組むことができる子どもは約6割だった。

Q 現在、お子さまは、どれくらいあてはまりますか？

家での学習の様子 (小1)

図 1-6 ■ とてもあてはまる ■ まああてはまる



解説

図 1-6 で「とてもあてはまる」が多い順に、「学校から出された宿題をやる」84.8%、「毎日楽しく学校に通っている」74.2%、「自分で翌日の学校の準備をする」59.1%、「学校からの連絡物を家族に渡す」56.0%、「家で学校のできごとについて話す」43.8%と学校に直接かかわる項目が並んだ。次に、学校以外で学習への興味や関心にかかわる「図書館で本を読んだり、借りたりする」「興味をもったことについて、学校の勉強にかかわらず知ろうとする」が続き、最後に、学習の姿勢についての項目が並んだ。家での学習の取り組みは、小学校の学習生活と直接結びついて、築かれていく様子が見えてくる。

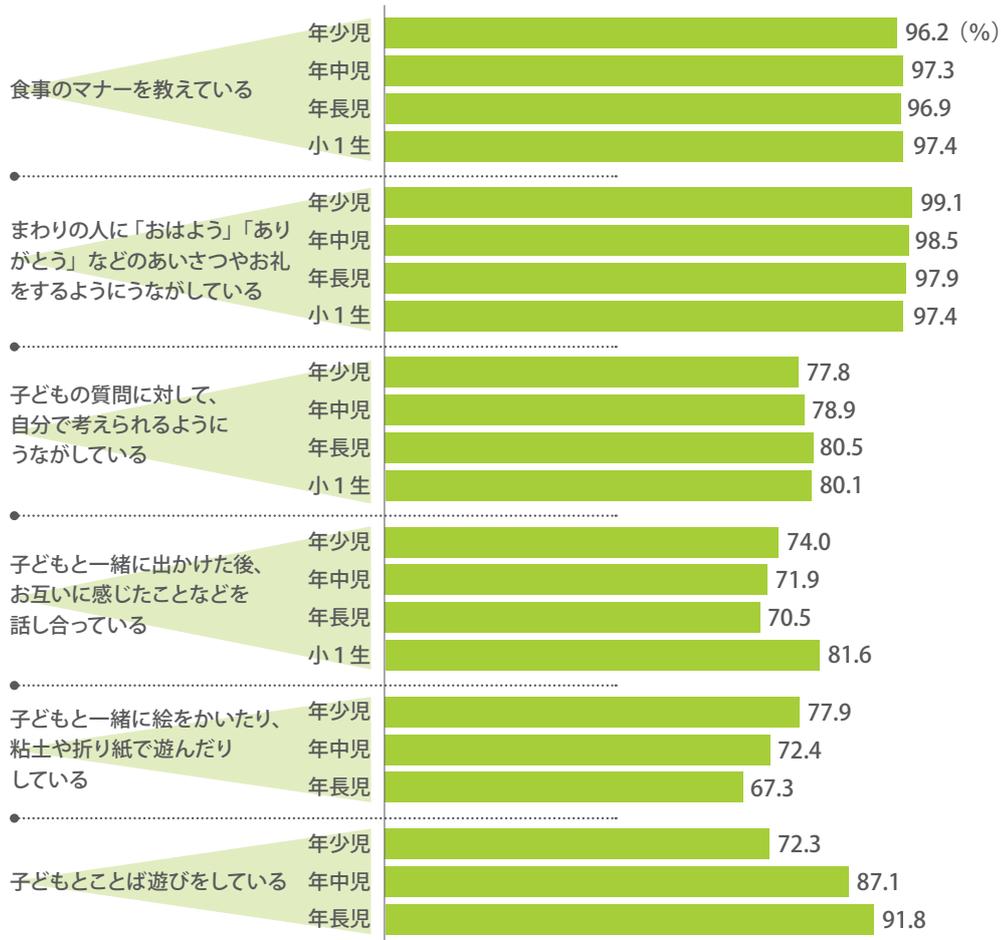
2 親のかかわりの様子

親の働きかけ

Q 日頃、お子さまとの生活の中で、あなたはどれくらいしていますか？

家庭での親の働きかけ（年少児～小1）

図 2-1 ■ よくある+ときどきある



家庭での親のかかわりをみると、粘土や折り紙、ことば遊びなど子どもと一緒に活動する働きかけは学年により変化した。一方、生活習慣や学びに向かう力をうながす働きかけは学年による変化はほぼみられなかった。



図 2-1 をみると、親子で粘土や折り紙遊びの頻度は「よくある」と「ときどきある」を合わせて、年少児 77.9% → 年中児 72.4% → 年長児 67.3% と減り、ことば遊びは年少児 72.3% → 年中児 87.1% → 年長児 91.8% と増え、年長児の母親で約 9 割が行っていた。食事のマナーやあいさつやお礼は、学年にかかわらず、いずれも 96% 以上と高い割合で行っていた。一方、「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている」働きかけは学年による変化がなく、8 割程度だった。



親の絵本や本の読み聞かせ

Q あなたは日頃、どのくらいの頻度でお子さまに絵本や本の読み聞かせをしますか？

親の絵本や本の読み聞かせ頻度

図 2-2 ■ ほとんど毎日 ■ 週に3~4日 ■ 週に1~2日 ■ 月に1~3日 ■ ほとんどない ■ 無答不明

年齢	ほとんど毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~3日	ほとんどない	無答不明
年少児	27.2	23.8	26.6	14.0	8.1	0.4 (%)
年中児	21.8	18.6	29.7	18.0	11.8	0.1
年長児	13.9	15.7	28.5	21.4	19.9	0.5

親の絵本や本の読み聞かせ頻度は、年少児でもっとも頻度が高く、年長児でもっとも低かった。また、年少児において親が絵本の読み聞かせをしているほど、子どもが1人で絵本や本に接する頻度も高くなる傾向がみられた。

Q お子さまが1人で絵本や本を読む(見る)ことはどれくらいありますか？

子どもが1人で絵本や本に接する頻度(年少児・親の読み聞かせ頻度別)

図 2-3 ■ ほとんど毎日 ■ 週に3~4日 ■ 週に1~2日 ■ 月に1~3日 ■ ほとんどない ■ 無答不明

親の絵本や本の読み聞かせ頻度	子どもが1人で読む頻度	ほとんど毎日	週に3~4日	週に1~2日	月に1~3日	ほとんどない	無答不明
ほとんど毎日 (371)	ほとんど毎日	55.5	23.5	14.6	4.3	0.0	2.2 (%)
週に3~4日 (325)	ほとんど毎日	42.2	37.2	15.7	2.8	0.0	2.2
週に1~2日 (364)	ほとんど毎日	25.8	33.0	29.9	6.0	0.5	4.7
月に1~3日以下 (301)	ほとんど毎日	20.9	23.3	32.2	15.6	7.6	0.3

解説

図 2-2 をみると、親の絵本や本の読み聞かせをしている頻度が「ほとんど毎日」と回答した割合は年少児 27.2% → 年中児 21.8% → 年長児 13.9% と減っていた。

図 2-3 をみると、親が読み聞かせをする頻度が「ほとんど毎日」の家庭の子どもが1人で絵本や本を読んだり見たりする頻度は、年少児で「ほとんど毎日」55.5% だった。一方、親が読み聞かせをする頻度が「週に1~2日」の場合は25.8%、「月に1~3日以下」の場合は20.9%だった。親が子どもに絵本や本を読み聞かせる頻度が高いほど、子どもが1人でも絵本や本に親しむ割合が高くなる傾向がみられた。

調査研究会より

絵本や本の読み聞かせについて

絵本や本は、子どもたちが出会ったことのない世界や、身近な生活経験を深く振り返る機会を提供してくれます。また、読み聞かせによって他の人とその世界を分かち合う喜びも共有できます。もちろん、小学校では書き言葉が中心になるので、そこへの入り口でもありますし、物語だけでなく自然科学など様々なジャンルに触れる機会ともなります。

親子で読み聞かせをするとき、「子どもの様子を見るのが8割、読むのが2割」を意識するとわかりやすいでしょう。子どもがどう夢中になっているのか表情を見届けながらともに楽しんで読むといいでしょう。さらに、子どもは幼児期に自分で少しずつ考えられるようになります。年齢が上がるにつれて淡々と描写するように読み、子どもから質問が出たり、もう一回と言われたりしたときに繰り返すなどして応え、子どもの思考をフォローしていくといいのではないのでしょうか。親子の読み聞かせを通して、子ども自身が絵本や本を読みながら考えていくことで、豊かな文化の世界を楽しむための根幹の力になっていきます。

2 親のかかわりの様子

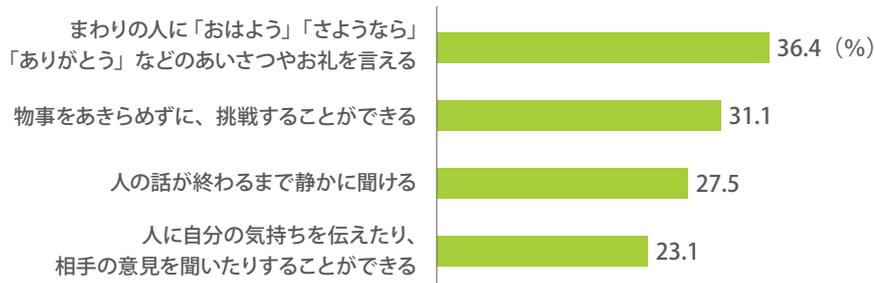
小学校入学までに身につけてほしいもの

Q 今、振り返ってみると、お子さまが小学校に入学するまでに、身につけておいたほうがよかったと思うことは何ですか？(3つまで選択)

生活習慣、学びに向かう力(小1時点での振り返り)

図 2-4

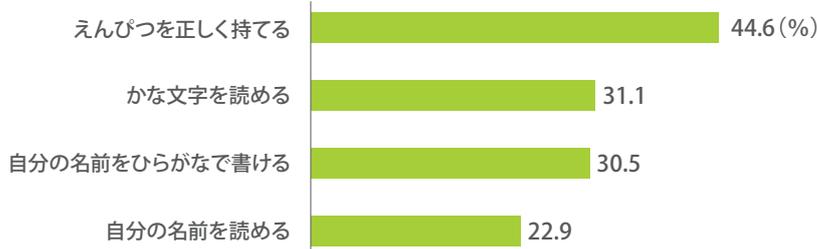
※ 18 項目から上位 4 項目。



文字・数・思考(小1時点での振り返り)

図 2-5

※ 11 項目から上位 4 項目。



小学1年生の時点で幼児期を振り返って、親が子どもに身につけてほしいことを聞いたところ、生活習慣や学びに向かう力では、あいさつやお礼が言えることに加え、挑戦する気持ち、人の話を聞くなどが上位にあがった。文字・数・思考では、えんぴつを正しく持てる、かな文字が読めるなど、小学校での日常的な学習生活に必要なスキルが上位にあがった。



調査研究会より

幼児期と小学校での学びをつなぐもの

小学校に入るまでに身につけることとして、あいさつやお礼を言えることと、えんぴつが正しく持てることが大切であると親は認識していることがわかります。あいさつは家庭や園での毎日のやりとりの中で習慣となります。えんぴつの持ち方は練習が必要ですが、えんぴつで絵を描く、迷路遊びをする、模様を描くなど楽しみのある活動で使ってみるとよいでしょう。かな文字の読みは、絵本に親しみ、まわりにある文字を読むことが多ければ身につきます。自分の名前を書くことは、丁寧に書く練習でできるようになります。

一方、挑戦する、質問できる、人の話を聞けるなど学びに向かう力が重要ととらえられているには意味があります。この学びに向かう力は小学校の授業に参加し学ぶ力の要です。それは幼児期に遊びに集中でき、大人と対話することで育つのです。



小学校で知りたいこと・親の周囲とのかかわり

Q あなたは、お子さまが通う予定の小学校に関して、どのくらい知りたいですか？

小学校について知りたいこと（年長児）

図 2-6 ■ とても知りたいと思う

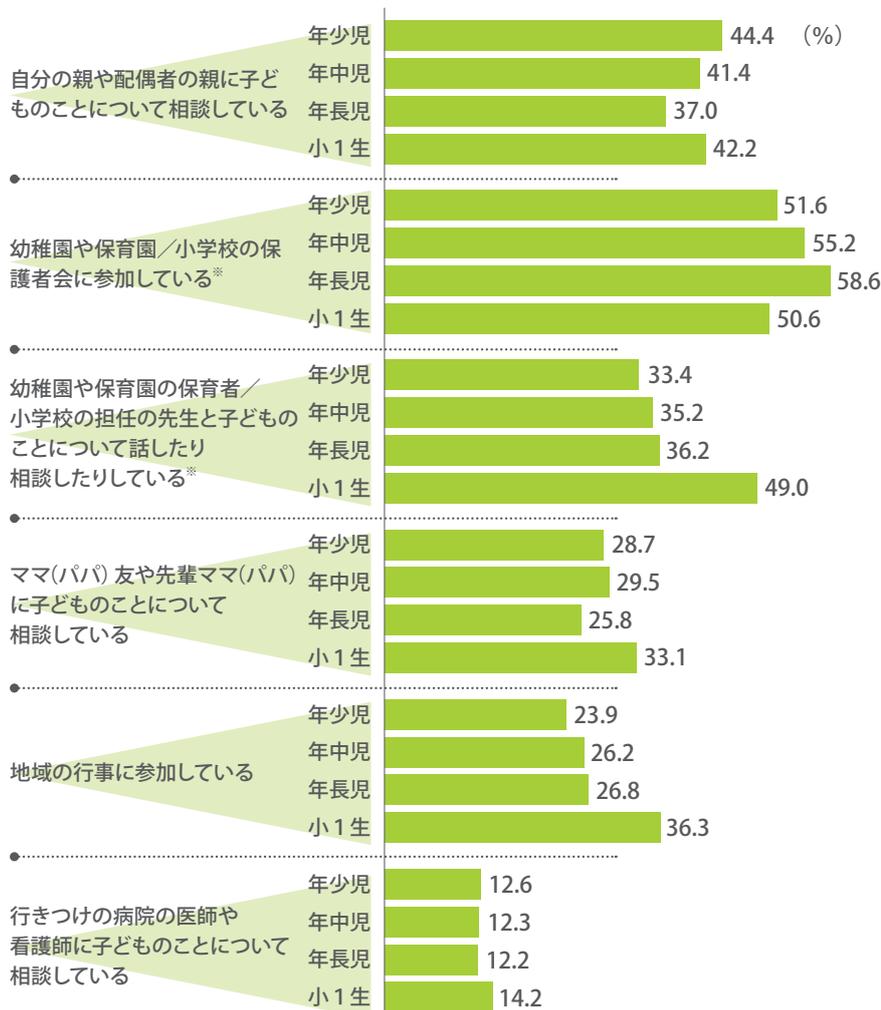


年長児をもつ親に、小学校について知りたいことを聞いたところ、安全な登下校、授業の進め方、身の回りのことなどが上位にあがった。親の周囲へのよくある相談先として、自分の親や配偶者、園や学校の先生が約3～4割で、年長児から小1生にかけて増えていた。

Q あなたは、現在、どれくらいしていますか？

親の周囲とのかかわり（年少児～小1）

図 2-7 ■ よくある



*未就園は除外して集計。

解説

図 2-6 をみると、小学校について知りたいこととして、「安全な登下校」53.2%がもっとも多く、ついで「授業の進め方」39.0%、「身の回りのこと」27.6%と、小学校での学習生活についての項目があがった。幼児期は通園に親がつきそい、子どもの園での活動の様子をみる機会があるが、子どもだけで登下校する小学校では、そのような機会が減ることが影響していると考えられる。

親は子育てをしていくなかで、周囲とどれくらいかかわっているだろうか。図 2-7 をみると、相談することがよくあるのは、自分や配偶者の親、園や学校の先生が約3～4割、ママ友や先輩ママ、地域が約2～3割、医師や看護師が1割程度だった。年長児から小1生になるときに、自分や配偶者の親、学校の先生、ママ友や先輩ママに相談する頻度が増え、地域の行事への参加も多くなっていた。

3 学びの形成に必要なこと

幼児期の学習準備

生活習慣と、学びに向かう力

● 物事をあきらめずに、挑戦することができる (年長児)

図 3-1 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



年長児をみると、生活習慣が身につけているほど、学びに向かう力、文字・数・思考の項目について、できると回答した割合が高い傾向がみられた。

● 人の話が終わるまで静かに聞ける (年長児)

図 3-2 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



生活習慣と、文字・数・思考

● 指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる (年長児)

図 3-3 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



※生活習慣が身についている：「夜、決まった時間に寝ることができる」「脱いだ服を自分でたためる」「食事が終わるまで、席に座ってられる」「好き嫌なく食事ができる」「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」「家で遊んだ後、片付けができる」の7項目について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

● 自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる (年長児)

図 3-4 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



学習準備としての3つの軸にはどのような関係があるだろうか。図 3-1～4 は、年長児での「生活習慣」と「学びに向かう力」「文字・数・思考」との関係についてみたものである。図 3-1 をみると、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」割合は、生活習慣がある 83.5% → まあある 69.1% → あまりない 53.3% と、生活習慣が身につけているほど高かった。また、図 3-3 をみると、「数を足したり、引いたりすることができる」割合でも、生活習慣がある 92.0% → まあある 87.2% → あまりない 81.7% と、生活習慣が身につけているほど高かった。生活習慣の自立が学びに向かう力や文字・数・思考を支えていることがうかがえる。



小1での家庭学習の様子

幼児期の集中・興味・質問の経験と、小1での家庭学習の様子

● 机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる (小1)

図 3-5 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



幼児期に集中して遊ぶなどの経験を重ね、文字・数に親しむ習慣があるほど、小1での家庭学習に向かう姿勢が高い傾向がみられた。

● 勉強が終わるまで集中して取り組む (小1)

図 3-6 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



※幼児期の集中・興味・質問の経験：幼児期の学習準備を振り返る3項目「好きなことに集中して遊んでいた」「生き物や植物に興味をもっていた」「わからないことについて、まわりに質問していた」について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

幼児期の文字・数に親しむ習慣と、小1での家庭学習の様子

● 机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる (小1)

図 3-7 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



※幼児期の文字・数に親しむ習慣：幼児期の学習準備を振り返る6項目「20までの数を正しく数えられた」「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができた」「自分の名前を読めた」「かな文字を読めた」「自分の名前をひらがなで書けた」「絵本や図鑑を1人で読めた」について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

● 勉強が終わるまで集中して取り組む (小1)

図 3-8 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



幼児期に好きなことに集中して遊んでいた、生き物や植物に興味をもっていた、わからないことをまわりに質問したりしていた場合、小1で勉強が終わるまで集中して取り組むのは65.2%、あまりしていなかった場合44.4%だった。また、幼児期に文字・数に親しむ習慣が高かった場合、小1で勉強が終わるまで集中して取り組むのは72.0%、低かった場合48.7%だった。幼児期に集中して遊ぶなどの豊かな経験や文字・数に親しむ習慣が、小1での学習の成り立ちと関連すると思われる。

3 学びの形成に必要なこと

子どもの学習準備と親のかかわり

幼児期の学びに向かう力と、親のかかわり

● 物事をあきらめずに、挑戦することができる (年長児)

図 3-9 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



● 人の話が終わるまで静かに聞ける (年長児)

図 3-10 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



年長児で「物事をあきらめずに、挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」など学びに向かう力が培われている場合、親の子どもへのかかわりで、子ども自身が考えられるようにうながす頻度が高い傾向だった。また、文字・数・思考についても同様の傾向がみられた。

幼児期の文字・数に親しむ習慣と、親のかかわり

● 指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる (年長児)

図 3-11 ■ とてもあてはまる+まああてはまる



● 自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる (年長児)

図 3-12 ■ とてもあてはまる+まああてはまる





親の周囲とのかかわりと親のかかわり

園への相談と、親のかかわり

● 子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている (年少児～年長児)

図 3-13 ■ よくある+ときどきある



● 1つの遊びには多様な遊び方があることを子どもに気づかせようとしている (年少児～年長児)

図 3-14 ■ よくある+ときどきある



親のかかわりにおいて、子ども自身が考えられるようにながす傾向がみられるのは、どのような場合だろうか。親が幼稚園や保育園とかかわる頻度が高いほど、親が子ども自身が考えられるようにながしたり、多様な遊びがあることを気づかせようとしたりする傾向がみられた。

※園への相談：「幼稚園や保育園の保育者と子どものことについて話したり相談したりしている」を略した。未就園は除外して分析した。

解説

子どもの学びに向かう力を培うのに、親のかかわりはどのように関係しているのだろうか。図 3-9 をみると、年長児の子どもが「物事をあきらめずに、挑戦することができる」割合は、親が「子ども自身が考えられるようにながしている」頻度が高い場合 80.5%、低い場合 53.8% だった。図 3-10 でも年長児の子どもが「人の話が終わるまで静かに聞ける」割合は、頻度が高い場合 81.4%、低い場合 71.9% だった。図 3-11 をみると、年長児の子どもが「数を足したり、引いたりすることができる」割合は、「子ども自身が考えられるようにながしている」頻度が高い場合 90.7%、低い場合 73.8% だった。とくに、親の子ども自身が考えられるようにながす働きかけと、子どもの学びに向かう力には関連がみられる結果だった。

では、そのような親のかかわりを支えるのは何か。図 3-13、3-14 をみると、「園への相談」の頻度が高い場合ほど、親が子ども自身に考えられるようにながす頻度が高い傾向だった。



調査研究会より

「子ども自身が考えられるようにながす」とは

「子ども自身が考えられるようにながす」ということは、「親が子どもの言葉を聞いて応答することで、子どもを認める」ことから始まります。親の子どもへのかかわりという、「言葉かけ」を考えがちですが、最初によい聞き手になることが大切です。そして、「言いたいことはこんなことかな」など子どもの言葉を代弁してあげたり、「それってこんなこと」と言葉を足してあげたり、「もうちょっと聞かせて」と問いかけたりしながら、子どもがより詳しく自分で考える意欲を持てるようにしてあげるとよいと思います。大切なのは子どもと同じ目線で親も興味を持ったり、一緒に共感したりしながら、子どもの言葉をふくませ、子ども自身が考えられるようにしていくことなのです。

調査全体を振り返って

無藤隆先生

小学校の学習に何が必要か。文字と数が大事なことは確かです。ただ、ひらがなが読めるとか、自分の名前が書けることは日本の大部分の生活環境の中ではそう特訓しなくても身につくことです。読む力は実は語彙を増やすことが肝腎です。それは絵本を読んでもらうとか、大人との対話の中で言葉を豊かにすることで育つものです。

さらに学びに向かう力の重要性が見えて来ました。物事に集中し挑戦し、人とやりとりできることがその中心です。それが出来るのが小学校での学習が成り立つことの基盤となっています。また生活習慣の自立がそれを支えていることも分かります。それらのことは家庭教育と幼稚園・保育園での教育の双方が相まって進むものです。

幼児教育とは子どもの情緒が安定したところからやる気が育ち、そしてそれが遊びに集中する力となり、物事に挑戦する態度となっていくことなのです。園と家庭がともにそれぞれの役割を果たすことがそのことを可能にするのです。

秋田喜代美先生

次の3点が明らかになりました。第1に、文字・数・思考力は年齢とともに伸び、年長の2月頃にはほぼ皆に必要な力はついているということです。第2に、片付けや好き嫌いなく食べるなどの生活習慣には、個人差があり、まだ十分とはいえない子もいることです。そして第3に、学びに向かう力として、あきらめず挑戦する力や人の話を終わりまで聞く力などは、年長児、小1とも、かなり多くの親がまだ十分とはいえないと感じているということです。

生活習慣や学びに向かう力こそ、幼児期に家庭で大事に育てていくことが必要でしょう。またこれらの力は、環境が変わったとき、数値が下がっていることから、新たな環境に適応しながら子どもが状況に応じて学んでいくことでもあり、環境への柔軟性が大事だと考えられます。

園から学校への円滑な移行のために、家庭のくらしの中で、親のかかわりが大事な役割を担っていることが改めて明らかになったといえるでしょう。

幼児期から 小学1年生の 家庭教育調査 研究会

無藤 隆
(白梅学園大学教授)

秋田 喜代美
(東京大学大学院教授)

荒牧 美佐子
(目白大学専任講師)

都村 聞人
(東京福祉大学専任講師)

後藤 憲子
(ベネッセ次世代育成研究所主任研究員)

高岡 純子
(ベネッセ次世代育成研究所主任研究員)

田村 徳子
(ベネッセ次世代育成研究所研究員)

宮本 幸子
(ベネッセ次世代育成研究所研究員)

松本 留奈
(ベネッセ次世代育成研究所研究員)

邵 勤風
(Benesse 教育研究開発センター)



速報版

幼児期から小学1年生の 家庭教育調査

発行日 ● 2012年10月31日

発行人 ● 新井健一

編集人 ● 後藤憲子

発行所 ● (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所

デザイン ● 中村ヒロユキ (Charlie's HOUSE)

お問い合わせ ● 本調査に関するご意見・ご感想・お問い合わせは、下記までお願いいたします。

(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所

〒163-0411 東京都新宿区西新宿 2-1-1 新宿三井ビルディング 13 階

TEL : 03-5320-1229 受付時間 : 10:00 ~ 17:00 (土・日・祝日・12:00 ~ 13:00 を除く)

ベネッセ次世代育成研究所のホームページ ● <http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

(本調査、各種調査の結果は、こちらからご覧いただけます。)

ベネッセ教育研究開発センターのホームページ (BERD) ● <http://benesse.jp/berd/>

(12月1日より、本調査と関連して、「幼小接続」(仮名)のWEB特集を掲載する予定です。ぜひ一読いただき、様々な場面でご利用ください。)